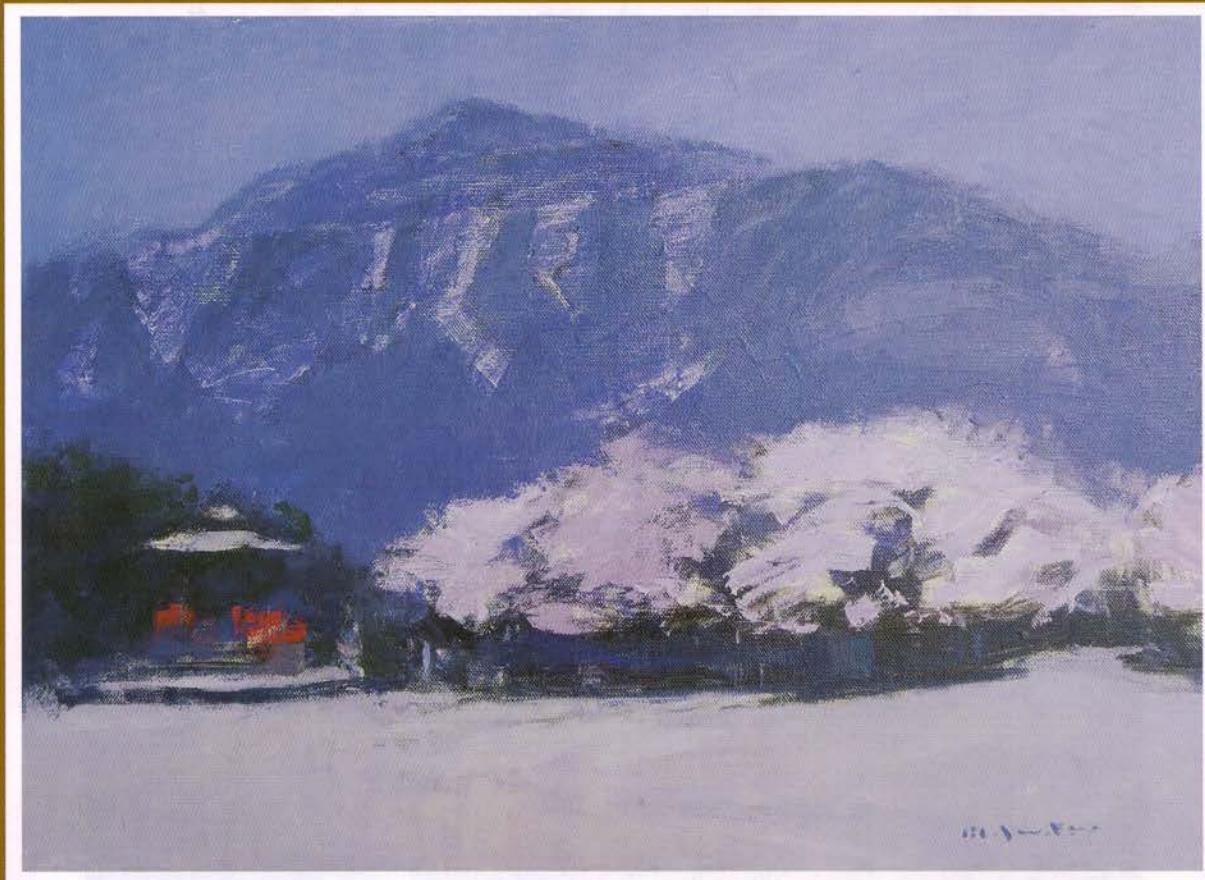


社乃杜

秩父神社社報
社乃杜(ははそのもり)

第52号
(大祭)

平成27年12月3日



高々と
武甲の
をはす
雲霧の村

「亀の子石」と「石燈籠」と

この度 夜祭りのお山斎場が芽出度く復元造成の運びとなりました。

今からちょうど二百年前の文化十二年十月に創設された「亀の子石」が新調され、併せて奉獻された石燈籠一基が里帰りしたのです。

今までどんな事情だったのか、歴史伝承館前の山神塚に仮住まいしていた石燈籠には、その南面に「奉獻 山神宮」その北面に「文化十二乙亥十月」その東面に「武甲山」その西面に「妙見宮」とそれぞれ刻銘があり、台石の南面にも「當所講中」とありますが、古い写真によると、元の斎場では「武甲山」を北向きの正面にしています。

初冬の一夜に山の神として武甲山さまを迎える、里の神として妙見さまが「亀の子石」までお出ましになる——そんなロマンが確かな造景になりました。

解説 秩父神社(51)

権利宣 甲田 豊治

◆「妙見信仰習合七百年」(三)

—亀の子石と絹文化—

本年、境内鎮座諏訪神社において、平成二十一年以来六回目となる御柱行事が行われた。本社である長野県・諏訪大社も、来年その年を迎える。

当社の例祭期間において、「諏訪渡神事」が宵宮に斎行されており、秩父に古くから息づいている諏訪信仰を窺い知ることが出来るのである。

平成十五年、学研から出版された週刊「神社紀行」11諏訪大社の中で、

絹・養蚕信仰にまつわる御姿(錦絵)



養蚕信仰にまつわる錦絵

『蠶養守護神画像』—衣襲明神真
（きぬかきみうじんしん）

秋の風土を象徴した妙見のお姿であると感じてなら

ない。中央には「妙見宮」と「御廣前」。右には「秋父神社」。左には「丁卯三月十五日神主家役人」と見える。社

影^{えい}である。左手には桑の枝を、また右手には蚕卵紙を持ち、馬に恋い慕われた養蚕・衣服・裁縫の守護神として語り伝えら

れている。更には

早春の寒さから桑の芽を守り、蚕室の蚕棚に鼠を近づけないなどの信仰も伝わっている。

ここに掲載する当社の妙見お姿上に立っている姿は他にも見ることができると、特徴的なのがその背後に見える陰陽の植物(桑)の存在である。これは他の妙見お姿には見られない、まさに養蚕守護(衣襲明神)の影響と、

そして、重要なのがその「朱印」である。この三カ所に押された印と「妙見お姿」の印が重なることから、遅くとも江戸後期の文化・文政の頃にはこのお姿が成立(存在)していたものと考えられる。

実はこの度の御鎮座二千百年記念事業の一つである御旅所の旧「龜の子石」の制作年代とも時代的に重なりを見せ、当時を知る貴重な資料である。

この「龜の子石」のキーワード

は「子」つまり、「子」=「子」

という解釈から、「子」は妙見の象徴である北の方角を意味しており、「龜の子石」自体、北向きに斎場に存在している。また、近世における例祭日は旧暦の霜月三日であった。

この霜月も実は、十二支で表現すると「子月」なのである。

更に、寛政年間(一七九〇年代)にまとめられた『武藏鑑』(福島東雄著享保十九年(一七三四年)によれば、



妙見お姿

秩父神社ハ地主ノ社ナリ・・・
崇メ祀ル妙見宮ハ元ノ如今尚昌ナリ

此神ヤ积ニテハ妙見菩薩
陰陽家ニテハ太上靈符
神道ニテハ子ノ神ト唱ヘ奉ル

北斗星一物異称ナリ
御旅所で再現される絹・養蚕文化の榮華の象徴である屋台笠鉢が織り成す時代絵巻と共に新たな秩父妙見神事が斎行されてゆくのである。



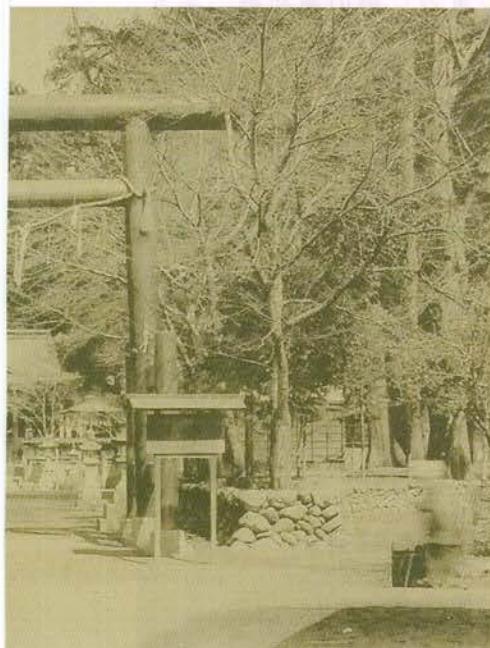
文化四年の御朱印

奉祝事業のご報告と「亀の子石」由来譚

宮司 蘭 田 稔

弊社におきましては、昨年度をもつて御鎮座二千百年の佳節を迎えたことで先の例大祭に百年に一度の式年大祭を挙行し、畏くも天皇陛下より臨時御奉幣を賜わるなど盛大な奉祝行事を繰り広げることができましたが、その後も引き続き記念の奉祝事業に取り掛かり、主に埼玉県指定文化財のご社殿修復などの境内整備と、夜祭り神幸祭のお旅所斎場の本格的造成とを主眼にして関連工事を進めており、これには特設の奉祝事業奉賛会を通して、広く氏子崇敬者を始め関係諸団体、企業法人のご協賛を賜わっておりますこと、まずは衷心より篤く御礼申し上げます。

お蔭をもちまして募財の面では順調に進んでおり、現在のところ弊社下境内に設置の掲示版に隨時奉賛のご芳名を掲げておりますが、ほぼ大方のご奉賛に立ち至りましたことで今回の社報発刊に併せ、詳細な奉納者名簿をお届けする手筈にしております。



の秩父神社前景

者名簿など今回の事業記録類を埋蔵して百年後にその成果を伝えることになります。また本社ご社殿の修復につきましても、当初は弊社自慢のメツセージ性豊かな彫刻群の補修を目途に県当局を介した専門家の調査を済ませたところでしたが、その専門的知見によりますと、徳川家康公直々の天正二十（一五九二）年再建から天和三（一六八三）年にかけて、それこそ江戸幕府草創期以前からの現社殿創建と権現造りへの先駆的造営という折角の歴史的価値をこの機会に建築史的に実証して、その修復が成った成果をもつて国の重要文化財指定を申請すべく本格的な事業に取り組んだらどうか、という趣旨の提案をも頂いて居りますが、いずれにしても県指定文化財としての修復事業に対する助成金申請は来年度に持ち越されますので、実際の施工は早くも再来年ということになりそうです。

奉祝事業につきましては、特にお旅所の造成には、今回の夜祭り斎場として新調した「亀の子石」と立派な神輿舎など本格的な境内整備を竣工致しましたが、新たに建立する予定の南北二基の鳥居は秩父育ちのヒノキ材を使うために乾燥の期間を要することや、奉納者刻銘を伴う石玉垣の付設、更に文化十一（一八二五）年にお旅所に奉建された貴重な石灯籠の復元、及び本事業に協賛された全ての奉納

そこで本稿の結びに代えて、お旅所斎場に鎮座して地元育ちの私どもには「亀の子石」との愛称で親しまれてきた石像の由来につき、最近得られた手掛かりの一端を申し添えることにします。そもそも件の斎場に何故「亀の石像」が設置されているかについては、夜祭りの伝承に詳しい地元の皆さんにはご承知の筈ですが、敢えて申しますと、今では公式に「秩父祭」と称し、広く「秩父夜祭り」と親しまれているこの神事祭祀は、遅くとも江戸末期までは秩父大宮の「妙見祭り」或いは「妙見まち」と呼ばれ、たとえば松本家文書に記す宝永六年（一七〇九）の『秩父領百姓年中業覚』では「妙見祭礼」と称しているように、要是当時の秩父神社が中世から江戸時代を通じて「秩父大宮妙見宮」であつたが故

に、恒例の夜祭り神事にお旅所まで出御するご祭神は他ならぬ「妙見菩薩」だからでした。古代中国で道教と習合した妙見信仰は北辰北斗を神座とする靈験あらたかな意味の「妙見」菩薩としてやはり中国における北方守護の玄武たる神龜に乗る神像の姿で古代日本にも各地に伝来したので、本来の秩父神社が中世に妙見宮となつた経緯はこの際省略するとして、ともかく明治近代に至るまでは、夜祭り神事に出御する祭神は神幸行列の大幣の姿になつて神龜の石像に立つ形となつたわけです。

明治維新以来は、いわゆる神仏分離により弊社も古来のご祭神に復し、夜祭り神幸祭も神輿渡御を中心に行ないますが、かつての妙見菩薩は神道における天御中主神即ち妙見神として今でもご祭神の一柱に祀り続け、斎場の「龜の子石」に立つ様式を継承しているのです。



【表紙絵解説】

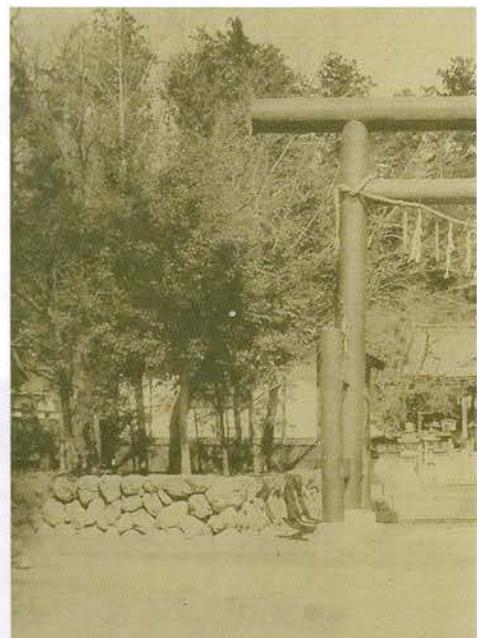
今回の表紙は、「柞乃杜」第十二号でもその作品を掲載させていただき、昨年八十九歳の天寿を全うされた故斎藤政一先生の作品です。斎藤先生は数々の出展や賞に輝き、生涯現役を貫かれ常に意欲的な活動を続けられました。こちらは八十六歳平成二十三年の作品で、春にも関わらず降り積もった雪のあと雄大な武甲山を背に静まる御旅所と満開の桜並木が描かれた作品です。此度、二百年ぶりに新しくなつたお旅所の子石も四季折々様々な表情を見せてくれるものと念願いたし掲載をさせて頂きました。

この度の作品掲載に当たり、ご遺族を始めご関係の皆様には多大なるご協力を頂いたことに感謝し、ここに厚く御礼を申し上げます。



【表紙歌解説】

今回の俳句と題字は、平成二十六年十一月平成二十七年五月にかけて埼玉新聞に連載されました。「ありがとうございます」武甲山・・・写真とうたでつづる思いの中から市内東町で坂上米穀店を営む浅賀信太郎様の直筆の句を掲載させて頂きました。私たちの郷土の誇りである武甲山は土地の國魂を宿す神の山であります。秩父の文化は武甲山の恵みにより培まれたと言つて過言ではありません。特に明治以降日本の近代化の一翼を担つたため山容は変化をしましたが、今尚、景観座標の原点であり続けています。この武甲山を愛する浅賀様におかれでは、朝日新聞社の朝日俳壇において、作品を寄稿、掲載されるなどの活動のほか、大祭音宮に斎行される「諏訪渡神事」の諏訪神社を護る株式魚菜市場の役員を務められているとの



大正末年、県社

なお今回のお旅所造成に当たつて、今まで「龜の子」と愛称されたほど親しまれてきた旧来の石像が余りにも摩耗が激しいため、新調した玄武の神龜に交替させ、本体は秩父まつり会館に安置して保存することに致しましたが、その作業過程でこの石像が、どうやら今から丁度二百年前の文化十二年に当時の心ある町方役人たちが妙見祭礼の再興を期して当の「龜の子石」と、武甲山・妙見宮・山神宮という文字を三面に刻銘した石灯籠一基とを斎場に創設したらいいことが分かつてきました。その詳細は次の機会にご報告しますが、やはり二百年前の地元先人たちが、私どもに先立つて地域活性化に尽力されたことに感動し、敬意を表する次第です。



(社)秩父宮会の関連事業報告

権柄宣 新井君美



秩父宮両殿下御墓所（豊島岡墓地）

当社とも所縁の深い徳川家康公が薨去されて四百年となる今年。日光東照宮では、去る五月十七日に四百年式年大祭が賑やかに斎行され、平成の大修理として国宝の陽明門をはじめとする大規模な保存修復事業が進められています。

平成十一年に「日光の社寺」としてユネスコの世界遺産に登録されましたが、かつて明治のはじめには、その管理が疎かになつた時代もあるようです。廃仏毀釈運動など過度の神仏分離を煽る風潮と、

今年は秩父宮雍仁親王殿下的薨去より六十二年、秩父宮妃勢津子殿下のご参列のもと、夫々のご命日に御陵のある豊島岡墓地において、厳粛の内に慰靈祭が斎行され、当社宮司をはじめ秩父宮会代表者も挙式を許されました。

また徳川宗家第十八代当主徳川恒孝様らのご参列のもと、夫々のご命日に御陵のある豊島岡墓地において、厳粛の内に慰靈祭が斎行され、当社宮司をはじめ秩父宮会代表者も挙式を許されました。

移りゆく世にあつてこそ、遠い先人達の尊い志に思いを致し、貴重な文化遺産を後の世にお伝え申し上げる責務を、今を生きる私達は等しく負っているように感じた次第です。

討幕を旗印に明治維新を成し遂げた政府官僚の一部には、徳川家の神祖を祀る東照宮をよく思わない者もあつたようです。

この時代、日光の貴重な文化遺産を後世にお伝え申し上げるべく奔走されたのが会津藩第九代藩主

松平容保公であり、秩父宮妃殿下の祖父にあたられる御方です。

明治十三年に日光東照宮の宮司に就任され、その後、日光二荒山神社の宮司も兼務、自ら日光の社寺修繕に尽くすべく「保見会」を組織され、これが現在の公益財団法人日光社寺文化財保存会の前身となりました。

今年は秩父宮雍仁親王殿下的薨

去より六十二年、秩父宮妃勢津子

殿下の薨去より早や二十年に當る

年でもあり、ご遺族の松平恒忠様、

孝子様らのご参列のもと、夫々のご

命日に御陵のある豊島岡墓地にお

いて、厳粛の内に慰靈祭が斎行さ

れ、当社宮司をはじめ秩父宮会代

表者も挙式を許されました。

また徳川宗家第十八代当主徳川恒

孝様らのご参列のもと、夫々のご

命日に御陵のある豊島岡墓地にお

いて、厳粛の内に慰靈祭が斎行さ

れ、

当社の神饌田では、武甲山からの伏流水により自然の恵みを受け、毎年おいしいお米が実っています。この神饌田がある横瀬町では、最先端の品種をはじめとして、約五十種類の稲が栽培されているのを御存じでしょうか。この事業は、御田植祭を奉仕していくだいている稻作研究家の熊崎氏が、平成九年に秩父神社で開催された稲の勉強会において、現在の「農研機構」にあたる団体の職員より、約千種もの稲種を譲り受けたことができたのがきっかけとなる



ふくろう
梶だより



り、横瀬町での取り組みが始められることとなりました。当初は棚田も耕作が放棄されており荒れはてていましたが、棚田のオーナーの育成や体験学習会を通じて、少しずつ棚田の整備が行わってきました。現在では埼玉県内で最も広い棚田となり、様々なイベントが開催されています。また、この棚田で作られた稻は、全国各地の研究機関などに送られ、おもしろ工夫な米作りの研究に用いられています。



武甲山写真奉納のこと

此の度、秩父市熊木町にお住いの
清水 武様より、お父上である写真
家清水武甲先生撮影の「武甲山」二
点を御奉納戴きました。

また、この作品においても秩父市や、横瀬町が舞台となつており、多くの方が聖地巡礼として訪れていました。

◆秩父神社妙見講

◆「」さけ 絵馬奉製

花の名前を僕達はまだ知らない。」
のスタッフによる青春群像劇の感動
物語です。

「あの

月に上映され、大ヒットの映画「心が叫びたがってるんだ。」

本年九月

花 文 神 亂

九月	六日	小鹿野講
松本	守講	元外百二名
九月十四日	上町講	
島崎弥平	講元外	百九十名
九月二十六日	中村講	
高橋徳太郎	講元外二百四十一名	
十月四日	上宮地講	
大島耕造	講元外百七十七名	
十月十二日	中町講	
久保忠太郎	講元外百三十三名	
十月二十四日	桜木講	
濱田雄司	講元外三十三名	
十月二十五日	東町妙見講	
三友直彦	講元外八十五名	
十一月十二日	野坂講	
十一月十五日	番場妙見講	
浅見伊久	講元外百六十八名	

◆ 杖乃杜神前結婚式報告

本年より桜木講演田雄司様
佐治様が新に講演に就任されました。どうぞ
宜しくお願ひ致します。

◆
杵乃杜神前結婚式報告

東京都八王子市 原瀬和浩・恭子様
秩父市番場町 加藤 誠・佑季子様
秩父市番場町 関根秀敏・優奈様
神奈川県横浜市 守屋茂樹・美穂里様
秩父市桜木町 金子 豊・美穂様
秩父市中町 新井 豪・さや香様
アメリカ合衆国 ハーヴ・オーシー・ト佳様
秩父市中村町 阿保好一・奈美枝様
秩父市道生町 沼尾裕二・智子様

未永く幸せな家庭を築き戴きますよう
お祈り致します。

◆御旅所整備工事実施設計
施工を担当して

(有)荒木社寺設計

代表取締役

坂本 智徳 勝

取締役専務 坂本 智徳 勝



この度、御鎮座二千百奉祝事業の実施設計・施工を御下命戴きました(有)荒木社寺設計です。まず先祖代々に渡り秩父神社様の仕事に携わらせていました。基壇位置に関しては解体前に龟の子杭に記しました。上屋基礎を先行して造り、統いて基壇石積をし、少しずつ埋め土、転圧、石積を繰り返しました。石積完了後、階段の石材、玉垣土台石（ならし石）を据え付けた後敷石や縁石を据えました。

平成二十六年十一月、御旅所Ⅱ秩父の中心というテーマを掲げて始動しました。基壇スケールは基本設計に習い決定し、上屋の大きさは、神輿の大きさ、山車との調和、全体のバランスを熟考し決定しました。打ち合わせを重ね、完成図面の決定後

お話ししたいと思います。

の翌二十七年三月中旬に解体清祓いを執り行い既存部を解体しました。基壇解体に先立ち、文化財保護課及び審議委員の先生方に発掘調査をして戴いた後、上段のみ更地にしました。

◆林家たい平師匠
「鯉の滝登り」切り絵奉納

この度、秩父市出身の落語家で、

日本テレビ「笑点」をはじめ、ラジオ、司会やトーク、歌や映画の方面に

も幅広く活躍されている林家たい平

師匠から、御鎮座二千百年を記念し

て、社殿彫刻「鯉の滝登り」を題材

にした切り絵作品を奉納戴きました。

たい平師匠は、武藏野美術大学造形学部を卒業後、林家こん平師匠に

入門。自身の名前因んだ縁起物で

ある「鯉」の姿を手拭やサイン色紙

などにあしらい、落語だけにとどまらずに多方面にそのセンスと才能を

発揮されています。

この度の作品では、龍門の滝を懸命に泳ぎ昇る鯉の躍動感と、見る者に今にも降りかかるきそなダイナミックな水しぶきが表現され、まさに「登竜門」を経験された師匠だからこそこの作品であります。現在、この作品は平成殿口ビーに展示されておりますので、是非ご覧下さい。

編集後記



※本報の用紙は再生マット紙を使用しています

平成二十七年(二〇一五)十二月三日
編集発行 秩父神社社務所
〒368-0041 埼玉県秩父市番場町一-十三
TEL (0494) 23-10362
FAX (0494) 24-15596
印刷所 有限会社 拡文社 印刷所
〒368-0043 秩父市東町二七一八